カレンダー

いろんなことが起きたこの月が
一枚めくるだけで
忘れることができるのならば
どんなに救われるだろう

あなたがまだいたこの月の初め
その頃にはこの結末が
くることさえも想像できずに
当たり前のように過ごした

なりゆきを受け止めるだけで
できること何もなかった
せめて少しの覚悟さえも
持っていたなら違ったかも

見たくも見られたくもないこのカレンダー
修正テープだらけで
めくる日が来てスッキリするはずが
なぜか画像に残した

あなたがまだいたこの月の初め
その事実も含めて全部
捨てることがやっぱりできずに
どこかに残しておきたかった

新しいカレンダー
やけに白くてさみしさがつのる
せめて自分の予定がたくさん
あったのならば違ったかも

誕生日には

寒い風が吹いて粉雪が
ほんのりついた髪も一瞬で
暖かい鍋の湯気と混じり消えて
そしてフェイスタオル一拭きで
それも忘れる

今日の誕生日もいつものように
君が準備してくれたチゲ鍋で
よくあるありふれたメニューだけど
結局どこにも行けないからこれになったね

Ah Happy birthday to you
いつもありがとう
Have a fun birthday
これからもよろしく

人生まだまだこれから先がある
歳をとったなんて言わない
不満揉め事小言少なめにして
なかよくできるようにしたいね

結局積もらずに消えた雪
その代わり木枯らし音を立てて
開けた窓閉めた時風が高い音で
抵抗してた割にはあっさり途切れる

今日の誕生日は特別に
君の生まれ年の赤ワイン
よくあるありふれたプレゼントだけど
結局自分も飲みたいからこれにしたよ

Ah Happy birthday to you
小さなケーキ添えて
Have a fun birthday today
これからもよろしく

人生まだまだこれから先がある
歳をとったなんて言わない
家内安全塩分控えめにして
長生きできるようにしてね

儚い片想い

儚い想いは
虚しく消えてゆくもの

乾いた砂が風に吹かれていく校庭の
誰もいなくなってやがてくる夕暮れ
コンクリートの観覧席一人座っていた
届けられなかった言葉を探してた

なぜいつもこうなるのか
もっと気軽になればいいのに
不意に遭うその時に
絞り出す挨拶だけで

あなたの優しい挨拶
耳にするだけで終わる

いつもの白い空を一羽の鳥がゆく
何のために急いでるんだろう
小さな飾り物渡せないままに
手にしたバッグに押し込んで歩く

今はやはりこのままでいい
苦しむだけで済むのなら
この気持ち伝えることで
何かが壊れてしまいそう

あなたの何気ない笑顔
見ているだけで終わる

儚い想いは
虚しく消えてゆくもの

日向ぼっこ

日向ぼっこ　大人になって忘れてたよ

しばらくしてなかった日の光浴びて
少しはなれたとこに仰向けになった猫

外出控えてる感染対策
気がついた時には
家の中閉じこもり

このところのストレスも
何かが不足してたから
忙しい大人には
こんなにゆっくりできないよ

心と体にじんわり温かく
ゴロゴロとすることはこんなに素晴らしい

子供の頃には友達とたくさん
こんな広場でゆっくりと過ごした

このところのイライラも
何かが不足してたから
誰かを傷つけて
手遅れにならず良かったよ

日向ぼっこ　大人になって初めて気づく

冬の川辺で

冬晴れ　川のそば
差し掛かる橋の上
指で切り取った
雪景色の中で

岸辺の白さに色をなくして
黒い流れに光が映る

何もかも捨てて
気軽になるはずが
虚しさ広がってきて
寂しさつのるだけ

こちらをみて一羽だけ
佇むのはなんの鳥かな
そんなこと思っても
仕方ないと言われてる気がする

遠くの流れが少し霞んでる
わずかな気嵐　残るところを

マスクを外して見つめたそのとき
痛いほどの冷たさ喉を突き抜ける

強いと言われながら
つらぬいてゆくはずが
ただ一人置いてきぼりに
されたように感じるだけ

風をみて一本足で
佇むのはなんの鳥かな
そんなこと考えるより
今を生きろと言われてる気がする

愚息数え歌

ひとつ一人でやってみるのなら
今が一番いいのかもしれない
ふたつふるさと振り返らずに
自分の居場所たくさんこしらえて
寂しがるお母さん
たまにはメールして
みっつみんなで暮らせるのは
もしかしたら最後かもしれない

よっつ世の中甘くはないよ
困った時はいつでも来るがいい
いつついつでもお前の味方
二人いること忘れないでほしい
親元離れたら
そこからがスタートだ
むっつ昔の思い出たくさん
残してくれて本当にありがとう

都会の冬空

白くかすんでいた昼の空が
すっかり晴れた夜は怖いほど黒く
街を流れる川に映るネオンさえも
青白く光ってこの背筋に染み込む

ここまできたのに
予定突然なくなる
あてのない足取りで
肩先すぼめて腕を組む

これからどこで何をしようか
このまま帰るのはあまりに寂しすぎる

一人で飲むことなどとてもできない
そう思っていたはずが深くハマって
気がつけばいつだったか
深夜にチェックインした
シングルベッドの上　一人腰掛けていた

窓から見える空
さっきとおんなじ黒さに
この時間になっても
ビルのあかりまだ輝く

酔ってはずが素面に戻され
このまま寝るのはあまりに寂しすぎる